

# 和歌山大学 食農総合研究教育センター NewsLetter

令和6年3月31日  
発行

No.4

当センターは、紀伊半島を中心に、食と農林水産業の分野に関わる研究活動を通じて、学術研究の発展と地域社会との連携や地域貢献機能の強化に資することを目的に研究活動を行い、加えて研究成果の地域への提供や学内外における教育活動を行っています。今年度も、地域の方々と連携しながら、さまざまな研究教育活動を行うことができました。今年度の活動内容につきまして、皆さまにご報告いたします。

引き続き、当センターへのご理解やご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

## 地域課題の解決を目指した研究プロジェクトの推進

本センターの研究プロジェクトの一部をご紹介します

### 地域資源の循環や脱炭素による 農業や農村の活性化に向けた研究



紀北農芸高校での講義風景

東京大学未来ビジョン研究センターとの共同研究であり、和歌山サテライトとして活動しています。本年度は、研究活動とともに、教育活動に重点を置きました。①五大学合同合宿（高崎経済大学、広島大学、広島修道大学、琉球大学、和歌山大学）in 紀美野町での未来ワークショップの実施【テーマ：農山村再生と関係人口～つながりで考えるきみの未来】、②紀北農芸高校での未来ワークショップの実施【テーマ：「持続可能なわかやま農業の実現～地域資源を活用した循環型の農業を考える～」】などを実施しました。座学・フィールドワーク・ワークショップを分けて実施するとともに、今後は、県内農業系高校や商業系高校を中心に実施予定です。

### 「きみの地域づくり学校」開校 により農村における起業を支援



第1回 きみの地域づくり学校修了式

「関係人口創出プロジェクト」では、(1)還流人口(Uターン者)の創出、(2)移住者や地域おこし協力隊などの定住支援、(3)行政職員のリスクリングを目的に、紀美野町と連携して「きみの地域づくり学校」を開校しました。初年度は、56名（農村移住希望者、農業継業予定者、4市町の地域おこし協力隊、地域活動を行う地元住民、県・町の職員、大学(院)生、高校生など）が参加し、多世代の学びの場になりました。受講者は、大学の研究者等の専門家や事業者などから15講義を受け、また希望者は、センターの起業の現場で実践を通じて学びました。同学校は新テーマを加え、2024年度も開催されます。

<https://www.town.kimino.wakayama.jp/sagasu/machi/chikidukuri/school/index.html>



### 「ソルガム」×「地域」で 新しい「食と農」を発信



ソルガム試験栽培の様子

ソルガムはイネ科の作物で別名はモロコシやタカキビです。アフリカ原産で乾燥などのストレスに強く、日本のような温暖湿潤気候であれば種を蒔くだけで育ちます。実際2023年度に和歌山県の紀美野町にある「中田の棚田」の一面をお借りして、降雨のみでソルガムを栽培しました（写真）。ソルガムはイネやコムギと同じように種(実)を食べます。現在、大阪府立岸和田高校の教員(家庭科)や紀美野町内の飲食店らの協力を得て、ソルガムを使ったレシピの検討を始めています。今後は紀美野町から新しい「食と農」を発信することを目標に、地域の力をお借りしてソルガムの魅力を探っていきます。

## 都市農業振興に向けた JAわかやまとの共同研究



白石農園の視察

都市農業振興に向けて、現地視察と講演会を実施しました。JAわかやま管内の農業体験農園園主らとともに、東京都練馬区の白石農園、加藤農園（ともに農業体験農園）を視察し、現状の取り組みとともに、担い手確保対策などについて意見交換を行いました。その後、和歌山市内に、白石農園の後継者である白石秀徳氏をお招きし、「白石農園の多様な取り組み」と題して、講演会を実施するとともに、シンポジウム「若者が考える都市農業」でパネルディスカッションを実施しました。さらに、JAわかやま職員らと、JA兵庫六甲へ訪問し、都市型JAの取り組みについて意見交換も行いました。

## 果樹の剪定枝から生産できる バイオ炭の利用可能性に関する研究



みなべ・田辺地域：梅の剪定枝発生量等の  
実態調査(2023年11月22日)

バイオ炭とは、「燃焼しない水準に管理された酸素濃度の下、350℃超の温度でバイオマスを加熱して作られる固形物」と定義<sup>1)</sup>されており、農地土壌に施用することで炭素貯留効果があると言われています。そこで、私たちは、果樹から定期的に発生する剪定枝に焦点を当て、バイオ炭の生産と利用がどの程度可能かを調査研究することにしました。この調査は県公設試<sup>2)</sup>とも共同で実施しています。今年度は、みなべ・田辺地域の梅の木を対象に、樹齢別実態調査と難分解性炭素分析を実施しました。採取したサンプルを自然乾燥させ、バイオ炭生産の実証試験をする予定です。

1) 2019年改良IPCCガイドライン

2) 和歌山県果樹試験場うめ研究所、  
和歌山県工業技術センター

## 地域おこし協力隊の 活動支援・ネットワーク化推進



わかやま地域おこし協力隊ネットワーク

関係人口・定住人口として大いに期待される地域おこし協力隊ですが、活動の満足度を高め、任務先とのミスマッチをいかに防ぐかが課題として挙げられています。当センターでは、県と連携し、現役隊員を軸とする卒隊員・行政職員・地域との結びつきを強化すべくネットワーク化を推進・支援してきました。2023年1月には、卒隊生7人による「(一社)わかやま地域おこし協力隊ネットワーク(通称 TOK.net)」の設立が実現し、当センターも現役隊員の活動を支援しています。また、同年10月には、県内の地域おこし協力隊が本学の「価値共創基幹研究員」として初就任し、活動の幅を広げるべく定期的に大学に駐在、研究を行っています。今後も、和歌山県の地域おこし協力隊制度拡充への支援を継続していきます。

## 研究成果を活用した 「学び(教育活動・講義)」

### JAわかやま寄附講義 「食と農のこれからを考える」

本年度は、学生368人、JA役職員11人、行政関係者・聴講生ら19人が受講しました。毎年恒例のJAわかやま前年度受講者とともに、フリーランス農家や農業法人代表などが登壇し、熱弁をふるいました。最終回では、新規就農者が受講生からの質問に答える形式で、普段触れることのない農家のリアルに迫りました。



### 「地域づくりの理論と実践」の10年

「地域づくりの理論と実践」は、前身の「地域づくり戦略論」の開講から今年で10年を迎えました。都市農村交流を通じて農業・農村の課題解決に取り組む「ホスピタリティ豊かな地域づくり人材」の育成を目標に、幅広い分野の研究者および第一線で活躍する実践者を講師として迎え、学部生、大学院生、社会人が共に集い交流する多世代型の学びの場としての役割を果たしてきました。最終回に開催されたシンポジウムでは、本講義の成果として、本講義を継続的に受講した学生・卒業生から、主体的に農の現場や地域づくりに関わろうとする者、あるいはそれをキャリアとして選択した者を複数輩出するなど、受講生の当事者意識の醸成に貢献し、農の関係人口の創出につながった点などが報告されました。

本講義は今年度で終了となりますが、引き続き、「地域に学ぶ」場の創出に取り組んでいきます。

長年、本講義をご支援いただきました(公財)江頭ホスピタリティ事業振興財団に、心から感謝を申し上げます。

